
所在探し ～ 鬼となった者は何を思う～

花形 茶屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

所在探し　〜鬼となった者は何を思う〜

【Nコード】

N9656T

【作者名】

花形　茶屋

【あらすじ】

その子は、ただの子供。

見た目が平均男子よりかわいらしく、やんちゃばかりな男子に比べると物静かな子供だった。

けれど、その子は、ある日、テロに巻き込まれ、鬼となる。

生きる意味を求め、生きた喜びを求める。

—— 生きたい。

それが彼らが求める唯一の活路である。

000：地獄の穴（前書き）

数年前に考えた話ですので、文章の不手際などは気にしないでください。

この回は、プロローグ、つまりは元凶の話です。

000：地獄の穴

さんさんと輝く太陽の光が床を白く照らす。鉄格子の窓から見えるのは青い空と白い綿雲。それから時たま小鳥や輸送船が飛んでいるのを見ることができた。

此处とはまるで対称的すぎて、外を見ていないとどうにかなりそうだった。

破裂音。

一杯に詰められた水風船。それが爆発するような音が背後でなる。また一人逝ってしまった。目、鼻、口と至る個所の穴だけでなく、肉を突き破り青い飛沫を飛ばし、自分と同じくらいの少年が倒れた。青くあるが、それは間違いなく彼の体に流れている血液だ。

彼が倒れてすぐにこの空間の唯一の出口である扉が開かれた。汚染された環境の有害物質を調査するような格好をした者数人が黒く大きな袋を取り出し、乱暴にそれを放り込みチャックを締めている。

失敗作。

時間にして僅か五分。まるで軽く掃除でもするかのように作業を済ませて出て行った。

また、この空間に存在する人数が一人減った。自分もいずれあなるのだろうか。

灰色の天井と硬いベッドの上で寝る感覚は、最初の頃と何も変わらない。変化があったのは、周囲の壁や床に飛び散った色取り取りの血液と抉ったり凹んだりした破損だけ。

それでも、一番変化——改造されたのは自身の体だった。
鉄格子の窓から降り注ぐ太陽光が、白から徐々に赤に変わり遂にはなくなってしまった。

暗闇が訪れた。

最初に意識を取り戻した時もこんな真っ黒な時間だった。

シンとした暗闇に何かがうごめく音がする。その音に誘われ起き上がると、僕は囚人が着る縞模様の衣類をまとっていた。堅い床に寝ているかのような感覚を与えてくれるベッドから降りると、其処には幾組もの視線が僕を睨んでいた。

気が付けば、すぐ隣にも一組の視線がある。

暗闇に目を凝らして、見ればそれは自分と同じような年齢の子どもたちだった。男も女も関係なく、十代くらいの子供が全部で十人ほどその一つの空間に詰められていた。

そして僕は十一人目。

「君、名前は？」

ずっと隣にいたのか。

白い髪にサファイア色の瞳をした女の子。

この子は他の子とは違うものがあると一瞬で見抜けた。いや、訂正しよう。この子は普通だ。僕とこの子以外の九人がまともじゃないんだ。

まず瞳に活力がない。どんなに綺麗な色をしていても、隈や半開きで光が見えない。次に健康そうじゃない。痩せこけた頬が此処の食事が満足のいくものでないことが容易に想像できる。それに髪に艶がなくぼさばさだ。

「あなたの髪も脱色されたの？ 眼の色は？」

青い瞳の女の子がまた声をかけてくる。しかし、それに僕は答えられない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・此処はどこ？ 君たちは誰なの？」

僕が此処にいること自体に思い当たる節がない。だから、答える

という対応よりも疑問に対する解決と理解を優先したいのだ。

「此処は実験所よ。私もすこし前に入ったばかりなの。多分人体実験をして新薬でも作りたいんじゃないかしら？」

僕は愕然とした。人体実験所という事実にも驚愕したが、それ以上にその恐ろしい事実を淡泊に語る目の前の女の子に驚いた。まるで、日常会話で遠く離れた事件の事でも口にしてしているような口振りで、

「私はネミー。ネルミエリス・コーラン。ネミーでよろしくね」

「フィレル」

僕は未知という恐怖のせいかうまく会話することができなかった。

「フィレル君の髪白いよね」

ネミーがまじまじと僕を見つめてそう口にする。

「これは地毛。色素が薄いんだと思う。だから眼も紅くて、そういった質問を受ける事は度々」

その時、

「実験体番号——三番」

扉が開かれた。

その瞬間、部屋の空気が変わった。

開かれた扉には誰もいなかったが、確かなことはこれから何かが起こるという予感だ。

しかし、何も起こらない。

ふと、視線を他へ向けられると、さっきと同じように死んだ瞳が僕を睨んでいた。

いや、彼女をだった。僕の隣で扉を見つめている彼女に視線を向

けていたのだ。

「・・・・・・・・・・ちょっと、行ってくるね」

ベッドから降りて僕は茫然扉へと向かう彼女を見送っていた。
しかし、それもすぐに変わった。

「駄目だッ！」

そっちへ行つてはいけない。そう僕の中の本能が告げているような気がした。周囲の視線が彼女から僕へと移る。怖いくらい冷徹で恐怖を感じさせるそれを脇目に僕は彼女の手を取ってしまった。

「フィレル、はなして」

か細い声でネミーが言う。

「駄目だ。そっちは行っちゃいけない気がするんだ！」

「何してるっ！」

僕の予想外の行動に警棒のようなものを持った男達が駆け付けるのが見えた。

「早く離さないと、酷い目に遭っちゃうよ？」

「駄目だつて言ってるだろ？ 君が行ったらもう戻ってこない気がするんだよ」

あと数メートル。其処まで警棒が迫っていた。それなのに僕は離さず、ネミーも振り解こうとしなかった。振り払えば、僕の手が彼女の手首から離れる。それくらい弱い力でもって握っていたのに、彼女はそうしなかった。

「——ッ」

視界がぶれ、僕は扉に叩き付けられた。頭部の痛みに堪えるなんて真似は出来なかった。無様に苦痛を漏らし、顔を歪めた。それでも——

「さっさとその手を離せ！」

再度男が僕の体に警棒をぶち込む。

その度に僕は苦痛を表す。

離さない。

それでも僕は今度こそ固くネルミエリスの手を握り、離さなかった。

「フィレル、お願い離してよ……」

ネミーの声が震えてる。

泣いてるのか、ネミー。

声を出すこともままならない状態で僕は彼女の顔を窺おうとしていた。だが、彼女は顔を伏せ、垂れた髪の毛で見えなくしていた。

「何事だね？」

その声が僕らの騒ぎたてている通路に響いた。そのしわがれた声はとても耳障りな声ですり足とともに僕の耳に雑音として届く。

「何だね？」

「すみません。実験体が暴れ出したので、それに対処しておりまして」

警棒を持つ男達がやってきた老人にびしっと敬礼をして端に整列した。白髪を後ろで束ねた老人が僕を観察する。

「君は今日入った実験体だね？」

くぼんだ目をギョロリと光らせた老人が僕に説いているようだ。

口元の血を拭き、僕は老人を睨み返した。

「あんたは誰だ？ 此処は何処だ？」

「私はソン・ジャリル。そして此処は実験所だ。それだけしか答えようがないし、答える気もない。君は何をしている？ 見る限りこの実験体と何かありそうだが？」

ソンはネミーを見てそう口にしゃがった。実験体？ ネミーがかな？ それに僕の事もそう言った。一体此処は何をしているんだ。実験というのだから、僕らに何かさせるもしくはするのだろうか――

「■ ■ 実験をして新薬でも作りたいんじゃないかしら？」

さつきまでのネミーとの会話でその一言が僕の脳に蘇った。

まさか、人体実験か！

「まあ、理由は大したことではない。こちらの問題ではないからな。しかし、実験体を離してくれないと、私の研究が進まない。それは大いに私の問題となるのだ！」

手を前へ出し、大きなジャスチャーを交えて叫んだ。

こいつ、目を見てもそんな気がしていた。

こいつは狂ってる。

イカれた薬品の研究者の成れの果てはきつとこんな奴だろうという例を上げるとしたら、コイツに違いない。

そんな奴にネルミエリスは渡せない。彼女と僕の間にあるわけではない。ただ、そうしたくない。

僕は苦痛を堪えて立ち上がった。

「え？」

ネミーの耳元である言葉を囁いた。

彼女は聞き取ったことに疑問符を浮かべた。

「——ってやる」

彼女にささやいた事と同じことをソンに向かって発する。

「何だって？」

感情の高ぶりに乗じて声が漏れたために彼にははっきりと聞き取れなかったようだ。

「俺が実験体番号三番の代わりに——ネルミエリス・コーランの代わりに実験を受けてやるって言ってたんだよッ？」

宣言した。腹に思いつきり力を込めて叫んでやった。

ソンは一瞬呆気に取りられた顔をする。しかし、すぐに笑みを浮かべた。気持ち悪い笑みだ。変態みたい表情だった。

「面白い。全く以て興味深い発言だ。良いだろう。今日の実験は薬品の『投与』だった。それには健康な実験体の方が好都合だ。おい、こいつを連れていくぞ。三番を中に入れ直しておけ」
「ハッ！」

ソンに引つ張られ、通路を進む際に一度振り返る。

閉まる扉の隙間から青い瞳と白い髪が、見えた。

壹枚目：最後の遊戯

きっかけは些細なもの。

「そろそろ街に買い物でもしに行ってみようかな・・・・・・・・・・」

三つ年上のメリ姉が、そう言ったのが始まりだ。

それまでは、雨の続くじめじめして洗濯物もまともに乾かない時期が何週間も続いた。

にわか雨の時もあれば、長く霧雨が続く日など様々だ。
そんな時期にも、終止符が打たれる。

今日は久しぶりに文句なしの青天である。

「ねえ、アリスも行かない？ 千春ちゃん^{ちはる}は来るって言ってたよ？」
目のまえの女性は、わざわざ校舎を挟んで反対に位置する自分の寮からこの寮の私の部屋に来て、あまつさえ勝手に部屋に上がりお茶まで^{ちやうど}拵えているのだ。

メリーアル・ハイジェリガ。この学園の生徒会長であり、アリスがこの学園に入ってから今日まで毎日と言って良いほど世話を焼いて焼かれてきた存在だ。

「でも、メリ姉。今日はあまり良くない事が起こるかも・・・・・・・・・・」

私がそう言うと、メリ姉はピタツと動きを停止して振り返る。
その顔は「何で？」と言っているのがはつきりと理解できた。
「だって、今日の私たちのカードは『塔』^{タワー}みたいですから」

私は手に持っている一枚のカードを提示した。
すると、メリ姉は不服そうに唇を尖らせて、むうと唸りだした。

「『^{タワー}塔』のカードは破壊や災厄を意味します。ちなみに個人の占いもやってみました、結果として私も『塔』で、しかも、メリ姉はこれから二日間ずっと『塔』でした。千春は『^{チャンス}運命の紐』でしたから千春を連れていくのは得策ですよ？」

カードをまとめ、占いのために用意したテーブル掛けを綺麗に置く。

ぶらぶらしている生徒会長からわかるように、今日は休校日である。

アリスは寮の自室で日課である朝の占いをして、今日の自分是不吉だと知ってしまった。だから極力外出を控えようと思っていた。

しかし、不吉と出たのだから、その結果に伴う事象は起こるのが自然の摂理というやつだ。

まず、朝食は食べる。生憎と部屋の冷蔵庫は空。

仕方なく食堂へ向かったのだが、それまでに生徒とぶつかったり、ふざけている男子の流れ弾が当たったりと、これだけで今日の自分が不幸だと、再度理解する出来事を体験したのだ。

食堂についてはもう災難だった。まず、配給の列にいと、割り込みをされる。次に、欲しかったデザートが朝だというのに完売していたのだ。

そして不幸への決め手は――。

ガシャン

複数のグラスが私の頭に降りかかり、当然のことなのかグラスの中身がこぼれた。

詰まる所、それは水である。

水を被る瞬間だけでなく、この危機的な瞬間に人間という生き物

は素早く状況を見る力があるようだ。

上から飛んでくるグラスと水。

足元でひっくり返り尻餅を取る事になるだろう一人の女子生徒。

そしてこれらの原因となつたらしい白いナプキン。

加えて置くが、私は決して背が高い方ではない。

よつて、私は思いつきり水を頭から被つたわけだ。

ずぶ濡れのままでは食事など出来やしない。

私は一度部屋に帰る事にした。着替えるものを探すのも億劫になり、ちやうど乾いて畳んでおいたジャージに着替えてベッドに飛び込んだ。

もともと、休みの日は対して何もしないので朝食など取らなくてもやっていける。そんなわけで私は部屋から出ないで今日は一日中買い溜めていた本でも読破してしまおうとしていたわけ。

そんな時断りもなく、人の部屋でお茶や世間話をしに来たのが、生徒会長様というわけだ。いくら人望が厚く、全生徒から人気があるからといって人の部屋にそれが当然のように上がられては困る。こちらにもプライベートがあるわけだから。

そう考えている時、またしても全くの了承なしに扉が開かれた。

「メリー先輩？ 準備できましたよ？」

軽快な足取りで軽くカールしたヴァイオレットの髪を揺らし、その少女は入ってきた。

「用意できたのね。こっちはアリスが着替えたらもう行けるわ」

メリ姉がカップ片手にそう答えた。

私はもう行くことになってるんですか？

「あの、二人とも」

「「ん？」」

私の呼び掛けに二人がそろって振り向く。

「わかつてますか？」

私がそう尋ねると、あからさまに何をという顔をされた。

よく考えてほしいものだ。

女子生徒二人が校舎を挟んで反対側に存在する『男子寮の一室』に堂々とやってくるのは、如何なものかを。

「うーん、アリスは厳密には男の子だけど、存在は女の子でしょ？」
メリ姉が意味不明な事を言っているが、それでは答えにならないから。

「もう、そんな細かいこと気にしてないでさつさと着替えなさいよ。
今日は先輩のお誘いで買い物に行くんだから。決まった事には時間
厳守で行動しなさいよ」

千春。女子生徒が男子生徒の部屋にやってくることは、細かい事に入らないと思います。むしろ大事です。

「さ、早いとこ着替えましょ。今日も可愛い服を用意したのよ」

「ほんと可愛いですね。これではアリスが衣装に負けちゃうんじゃないですか？」

メリ姉と千春が私に背を向けてきやいきやい騒ぐ。

——逃げなければ、死ぬッ？

「あらーん？ 何処に行くのかしらあ？」
捕まった。

がっちり私の足を捕らえたメリ姉がくるつと此方に頭を向ける。
メリ姉、怪しいよ。その笑い声。なんか呪文みたくも聞こえるし。
観念したアリスはすぐに、その場で、着せ替え人形のような扱い

を受ける事になる。

「もうつ、
あっ！」
いいいいやああああだつてぶあああああああ

アリス・ウィディアン。

十四歳。

某学園において中等学部二年五組に所属。

性別。女子
———
ではない。

女顔をコンプレックスにしている歴とした男子である。

■ ■ ■

「「あつ」

散々着せ替えをさせられた私は、彼女らが納得のいく衣装になるまで糸の解けた人形のようにじっとしていた。

そんなこんなで完成した今日の衣装は、あれだけ時間をかけたにも関わらず、普通に女子の制服となった。千春曰く、「いろいろ試したけど、胸ないし、シンプルな制服の方が胸なくてもいけそうだった」とのことだ。

そうして自室を出る。上機嫌のメリ姉と千春が完璧な女子と変身したアリスの両手を取って、駆け足で教務棟へ外出許可を取るため走らされた。

そんな時、私は今日一番打者の災厄関係者と再度顔を合わせた。事故とはいえ、水をかけてしまった事を思い出したその女の子は顔を真っ青にして、私を見つめていた。

「済みません済みませんっ？　ちよつとよそ見してたら足を踏んでっ、じゃなくてっ、ナプキンが拭いてっ！」

すごく錯乱している。

「ちよつと先に行つてっ」

千春とメリ姉は状況を理解してくれたのか頷いて教務棟に向かつて再度走りだした。

「何年生ですか？　私中等学部の二年です」

錯乱する女の子の頬に触れて落ち着きを取り戻させる。

「あ、はい．．．．．私は一年です。一年五組、ロメリア・タツカリナと言います」

「そうですか。それでは兄妹クラスですね。何か困ったことがありますしたら、いつでも声をかけてください。相談に乗ります」

ニコツとほほ笑むと、強張っていた顔の最後の皮が剥がれる様に女の子は綻ぶ。

それで別れようとしていたところを

「．．．．．あの、お名前は．．．．．？」

「これは失敬。私はアリス・ウィディアン。アリスで結構ですよ。

ロメリアさん」

そう告げて私は脱兎の勢いで先に行った二人を追いかける。

アリスが立ち去った廊下でいつまでも呆然としている少女――
ロメリアはほうつと想いを寄せるように手を合わせていた。

「アリスお姉さま？」

優美な女装のアリスに好感を持ったロメリアが、彼女を彼だと認識するのは遙か先の事。

確かに、ロメリアが間違うのも致し方ないだろう。

何せ彼は女顔で、女装をしてメイクまでさせられていたのだ。少し髪が短い事など何の問題もない。

■ ■ ■

彼らの学び舎【レピアス学園】から町までは、大体15キロ近く離れているが、ものの五分で移動が可能。その理由は、この国が最先端技術の固まりだからだ。最先端技術の国と言えば、【アルフィンシ】と出るほどの著名なのだ。彼らが住む国は、近隣の諸国の中で一、二を争う最先端の技術力を持った国である。

最先端技術の国家と言われれば、金属だらけの堅いイメージがあるだろうけれど、この国は違う。コンクリの地面があれば、石畳の地面もある。ビルがあれば、木造の建物だつてある。工場があれば、森林だつてあるのだ。入り混じっている事はないが、それぞれの区域にはそれらがしっかりと存在している。

よって、空から見たアルフィンは技術都市と自然区域が国の中心線できっちりと半分に分けられた形に見えるのだ。

「これからどうする？」

年月の感じられるロープをまとった二つの人影が自然都市の中で彷徨っている。とても小さいのとそれなりに大きいその両者は、フードを被って顔を隠している。

「一先ず、何か食べよう。町にいる間に食事を済ませ、食料を調達しておかないと、すぐに移動できないからね」

「だが、もう移動することなどない」

「まだわからないさ。完全に終わったわけじゃない。さあ、入ろう？」

大きいほうのローブがそう言うと、小さいほうが頷いて近くのカフェに入っていく。

しかし、店内は一杯でテラスに行く羽目になり、二人は一番奥のテーブルに腰を下ろした。注文をして、五分後に料理が運ばれてきた。

「それは私」

ソムリエが白髪の男性の前にグラスを置いて、注ごうとするのを金髪の少女が止めた。

ソムリエはすぐに男性と少女を見比べ、戸惑い始める。

「大丈夫です。彼女はこう見えますが、歳は僕より上です」

それを聞いてソムリエは、目を見開いた。が、すぐにグラスを彼女の前に持っていく、紅いアルコール入りジュースを注いだ。

「この形はこういう時、不便でならない。幻術でも掛けていようか」少女は仏頂面でグラスを口元に持っていく、小言を吐く。

男性はそんな少女を見て、赤い瞳を細め、口元を緩めた。

式枚目：オルゴールとともに終わる平穩

「・・・・・・・・・・・・・・・・あの、毎回こんな目に遭ってないですか、私・・・・・・・・・・」

化学繊維でできた毛束、一般に言うエクステを付け、シックな感じの黒い制服（演劇部から拝借された）を着た少女が町中を歩いている。

エクステの不自然さが僅かに残る頭部は、それを忘れさせるほど気品のある顔立ちをしており、通り過ぎる者の視線を問答無用で引き寄せていた。

本人は周囲の目を気にしてあちこち見まわしているのに、その行動が彼を『高貴な身分の令嬢で、下町を珍しく思っている』といった様子に見せてしまうのだ。真っ黒な服を召しているのも目立たぬように変装をしているのかもしれないと、周囲の漢どもにはそう想像させてしまう。

「ほら、こんなの付けたらもつと良いかもしれないわよ？」

『おおおおっ！』

千春とともに露店を見ていると、背後で何やら感動の声の様なものが上がった。

振り返れば、其処にはにっこり笑みを浮かべた癖っ毛の女性が、鏡を私に向けていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・何、これ・・・

「……？」

黒猫がいる。

緑の装飾が施された手鏡の中に映る少女は、奇しくも女子に見えてしまうが、おかしい部位が一か所ある事に気付かないはずがなかった。むしろ、メリ姉がそれに気付かせたくて鏡をやや上方に向けているのだから気付かないはずがない。

『あああ………』

頭に装着されたものに手を伸ばすと、それまで彼に釘付けだった漢どもが物悲しい声を上げる。

誰が、こんな気恥かしいものを付けていられるか。

外したその特殊性癖を示すかのようなカチューシャをもとあったところに戻してくるようメリ姉に押し付けた。

「可愛いだからつけてればいいじゃない——？ネコミミ？？」
両手で摘むようにその端っこを持ってメリ姉が掲げる。

私はそれを見ないように、千春の背を押して次の露天に向かったが、おかしいことを考えていたのは、メリ姉だけではなかったようだ。

「アリス、自分の顔が可愛いって思ったことある？」

「ぶっ！？」

突然と有り得ない発言に私は、一瞬吹き出しそうになった。

「………嫌になった事はありませんが、この容姿や声、小柄な体格に見惚れた事は微塵ありません。」

そもそも、そんなこと思っていたら、私はナルシストじゃないですか」

「それもそうね。じゃあ、男の人に恋し——」

「ありませんっ——！」

とんでもないことを千春が言い切る前にアリスは叫んで断言した。
「大体そんな話をしてどうなるんです？」

疲れを感じたように背を丸めた私はしゃがんでアクセサリーを選ぶ彼女に問う。

千春が何を考えているとか、何がしたいのか私は彼女出ないからわからないけれど、こうして友人たちと買い物したり、どうでもいいような事を面白くしたりする時間は悪くない。

私だっけいつかは何処か遠い場所で、忙しい日々を送る事になるかもしれない。

卒業後だっけ、この国から出て専門の学校に留学するかもしれない。

その時は皆と離れて、独りで何でもしなくちゃいけない。

あの学園に来た時は、まだ兄がいた。

兄がいて、兄を通じてメリ姉と出会って、姉的存在のメリ姉が留学してきた千春の面倒を見ているうちに私たちは知り合ったのだ。

全部他人を間において広がっていった輪であって、一人で広げたものではない。

人は必ず独りになる時が来る。

その時私は一体——

「ずっと一緒にいらればいいのにね……………」

まるで、私の考えを見切って話を繋げたかのような台詞だった。

「私は留学生だから、いつかは国帰らないといけないんだあ。多分学園にぎりぎりまでいて、卒業したら帰ってくるように言われるはずだから」

広場の一角に設置されたベンチにもたれて空を仰ぐ千春は、遠くを見ているようだった。

四年。彼女に残された期間は、あと四年だ。一年後中等学部を卒業して、高等学部三年間通ったら、卒業。それでおしまい。千春は国に帰ってしまう。

「千春の国はどんなところですか………?」

ポンと浮かんだ事がそんな取り留めもない質問だ。

きつと先を予想した私は、今この時間の中でできるだけたくさんの言葉を彼女と交わしたかったのだろう。

「………小さな島国よ。此処見たく歩けば、どこか別の国にいけるような大陸じゃなくて、ホントに島が寄り集まって出来た国なの。私の名前に使われている『漢字』や『かな』を用いて文や文字を書くの。もともとは近くの大陸から伝えられたものらしいんだけど、私の国ではそれが発展して、別々の方向に成長していったの」

落ちている木の枝で、地面の土を削って彼女が複数の線を描きだしている。それには見覚えがあった。新学期クラスで自己紹介をする時、彼女の名前がどう描くのかわからなくて黒板に書いてもらった字だ。

「これで『狩野^{かりの}』、こっちが『千春』でしたね?」

「そうよ。じゃあ、これは?」

枝の先を器用に操って、さらに漢字が書き出される。

「………えっと、『マタ』でしたっけ?」

「ふふつ。これは『又』じゃなくて『友』よ。同じ意味で『仲間』ってのもあるわ。『仲』が良い『間』柄ってということじゃないかし

ら」

それから千春と東洋の言葉についてクイズの当てっこの様に話し合った。そうしてると、いつの間にか忘れられていたメリ姉が走ってきた。

「もうっ！ 二人とも勝手にどっか行っちゃダメじゃん！ すっごい探したのよ？」

「説得力無いですよ。特にその両手にぶら下げている荷物がそうさせています」

プンス力怒るメリ姉の両腕には、大量の紙袋が提げてあった。洋服のものから食べ物、袋まで多種多様々である。どう見ても気が済むまで買い物をしていたら、私たちがいない事に気が付いたという事が見え見えである。

「まあいいわ。それよりも見てこれ」

何やら可愛い小物を見つけたらしく、彼女は手にそれを載せて見せた。一見すると植物をモチーフにした木彫りをされた木箱だ。「此処を押すと・・・・・・・・・・・・・・・・」

メリ姉は木箱を開けてボタンの様なものを押した。

それと同時に彼女の背後で爆音が炸裂する。

たちまち黒い煙が上がり、逃げ惑う人々が恐怖の声を発して現場から離れていく。

「・・・・・・・・・・・・・・・・メリ姉、それなんですか？」

「違うって！ これはオルゴールなの！ た・だ・の・オルゴール！」

怪しく思い私は彼女を睨むが、どうやら彼女の言っている事は事

実らしい。爆音に混ざってメロディが響いていた。

「きゃああっ！」

「伏せてッ！」

二度目の爆音が、至近距離で炸裂した。

爆音の正体は上空から降り注ぐ炎岩^{マグマ}の塊だった。

それが至近距離で落とされた今、私達三人には粉々になった炎岩が火山弾のごとく襲いかかってきていた。

——《Cyrph（風よ）》——

制服の内ポケットからカードの束を取り出す。カードを広げ、呼びかける。彼女に呼応して一枚のカードが水色に発光し出す。束から引き抜いたのは『渦を巻いた風』の絵柄のカード。

「大丈夫ですか？ 千春っ！？」

背後にいるはずの千春から返答がない。

風圧の結界を保持したまま振り返る。

瓦礫の裏から伸びる白い脚は、全くピクリとも動かない。

目前には今にも被弾しそうな火炎を纏ったままの岩石。避けることはできない。かといって、千春を抱きかかえて避けるなどもっと無理。

メリ姉も今日は買い物に來ただけから契約獣はお留守番させていると言っていた。

風圧の壁といっても岩石を連弾されては敵わない。

ならば！

「メリ姉！」

「な、何っ！？」

背後で彼女の声が出た。どうやら無事だったみたいだ。

「誰が、こんな馬鹿な真似をしているのかわかりませんが、こんな

っては仕方ありません。二人だけ先に学園に飛ばします。念のため、この子も連れて行って下さい。行きますよ！」

一枚のカードを彼女に投げつけ、さらに一枚使用する。

空間転移のカードを使用し、学園に帰っても最低限の身の保証ができるカードを発動直前で留めたまま渡したのだ。

「ちよつと待——」

——《Tranp（跳べ）》——

——《Niente（触れずに消える）》——

灰色と黒の光がカードから二人に向けて放たれる。二人を包んだ光は瞬時にアリスの命令通り学園に向かって飛び去った。

私も早く非難しなくてはならない。

始めに発動させた風の守りを永続させてアリスは走り出す。『転移』のカードはさつき二人を飛ばすのに使ってしまったから、彼らが学園についてカードの効力がなくなるまで使えない。他にアリスが使用すべき

カードは今はない（……）。だから走るしかないのだ。

「きやつ！」

悲鳴に反応して体が瞬時に反転する。

「危ないッ！」

其処には転んでしまった幼子と——降りかかる炎岩が迫っていた。

——《Cyrph（風よ）Lei（あの子を！）》——

水色の光を帯びた風が瞬時に幼子に絡みつく。
それとともに炎岩が地面に炸裂した。

地面に激突した炎岩は、さながら散弾の様。

「お姉ちゃん・・・・・・・・・・？」

土煙りの中誰かが私に触れた感覚よりも、体中に走る激痛の方が先に理解の範疇に侵入してきた。

最初に見たのは不安に顔を歪めた女の子の顔。今しがた助けたあの転んでしまった幼子だ。

「・・・・・・・・・・け、怪我、ない？」

女の子はぶんぶん千切れそうになるんじゃないかってくらい強くなずく。

「・・・・・・・・・・お姉ちゃん、血が一杯だよ？　はやく行こう

！」

——ああ、駄目だ。

私はもう自分がこの子と一緒に避難できない事を悟った。

なぜなら、自分がこの子の弱い力で引っ張られていたことに気付いたからだ。

手を握られているのに気が付かないほど、自分の体がイカれてしまった事に気が付いたからだ。

「あなただけで逃げて・・・・・・・・・・お兄ちゃん、もう・・・・・・・・・・疲れちゃったから・・・・・・・・・・お願い・・・・・・・・・・」

「いやだよ・・・・・・・・・・いつしよにいこう？」

きつと精一杯引っ張っているのだろう。視界がぶれる。

私を動かせないと見るや女の子は、私の服を引っ張ったんだ。それによって、制服の上着の内ポケットからカードがこぼれ落ちた。

「あつ、お姉ちゃんのカードが・・・・・・・・・・」

女の子がすぐにカードを拾い出すのをじっと見つめていると、一

枚のカードが目に残る。

「……………ねえ、そのカード……………見せて……………」

「これ？」

「うん」

そう言っただけの子が手渡してくれたのは、真っ白なまだ使う事の出来ないカードだ。

私のカードは【魔の樹木】という魔

マディック・デュール・アルフル

力を秘めたカードだ。私たちが中等学部に入學して初めての魔法学科の授業で召喚したもの。あの学園では中等学部になると魔法について学ぶ学科——『魔学』が増えるのだ。

その授業の初回授業で簡単に説明を受けた私たちは校庭に出て、それぞれ召喚の呪文を唱えた。この授業では【契約獣】を必要とする場面が多々ある。皆召喚に成功した生徒たちはそれぞれの魔獣、もしくは精霊を傍らに置いていた。

そして最後にするのは契約の儀式。自分の血を魔獣に飲ませることでそれは完了する。

しかし、私が召喚したのは魔獣でもなければ、精霊でもなかった。私の前に現れたのは一冊の重厚な本だった。【魔の樹木】と書かれた表紙を開けば、一つの見開きごとに一枚のカードとその効力が記されていた。

しかし、全部が使えて仕えるカードではなかった。真っ白なカードもあれば、発動できても指示に従わないカードもたくさんあった。重厚な本を持ち歩くわけにもいかない私は、説明を全部頭に入れて、カードだけを持ち歩くことにした。

だが、いつまでも真っ白なカードのままではないのだ。

「……………久々。初めまして———」
《歪曲する扉》エスベールさん……………」

さつきまで真っ白だったカードが黄色い光を放つとともに絵柄が現れた。『半開きになった扉』が描かれたのもだった。扉がこの状況にどんな意味を成すのか。不可解な点はあるとしても、不思議な事に何とかなってしまうんじゃないかという言い知れぬ確信が心のどこかにあった。

——《Espeal（連れてって）》——

カードが再び黄色い暖かな輝きを放ち始めた。

「さあ、此处から行つて……………」

「うん、わかった……………お姉ちゃんは？」

絵柄と同じで現れたのは、光を内包する扉。それに手をかける女の子はやっぱり私を氣にして振り返った。

「ごめんね……………やっぱり無理みたい……………」

・でも、最後にお兄ちゃんをお願い聞いてくれるかな？」

「うん！」

そう言つて女の子は扉を潜り抜けて母親のもとへ歸つて行つた。

参校目：Are you understand me?

国境近くに位置する広大な敷地面積を有する【レピアス学園】の学園長室。呆けた表情をした老人と女性の教師長、そして二人の女生徒。それぞれ重い表情を浮かべていた。

「つまり、先日国内で発生した謎の爆破テロ事件以来、我が学園の中等学部二年生である女生徒——アリス・ウィディアン君が、行方知れずであり、未だ消息がつかめないということだね？」

老人が立派な椅子から腰を浮かせて、報告書確かめていた。

「いえ、学園長。あの恰好はこの二人とおふざけであって、アリス君は男子生徒です」

「む、そうだったか」

しかし、其処で話は途切れてしまった。

誰も何も言おうとしない。

誰もなんと言って良いかわからないから。

慰めの言葉をかけるのは、まだ早い。

かといって、無責任に確証もない事を言うのはもっと悪い。

彼らは其処まで饒舌ではなかった。

永い、けれど長針は五つも回っていなかった。

その無限に続くかもしれない沈黙を破ったのは、一つのノックだった。

「学園長。急で申し訳ありませんが、どうしても会いたいと聞かない者が来ていますが……どうされますか？」

眼鏡をかけた丸々とした教師がほんの少し開いた扉から申し訳なさそうにのぞいている。

「それは、今でなくてはならないのかね？」

「それが、もう此処にいまして……どうも例の行方

不明の生徒について知っているようです」

その一言は其処にいる四人の顔に掛かった影を吹き飛ばし、驚きと僅かな期待を持たせた。

「……………入ってもらいなさい」

学園長の指示に従い、眼鏡教師は扉を開く。

訪問者を入れると、眼鏡教師はそそくさと退出していった。

「……………」

「……………」

去ったと思った沈黙が再び訪れる。

「……………ねえ……………」

「……………多分私も同じことを考えてます……………」

千春とメリアルがこそそと訪問者を見て小声で会話する。

「アリス君の手掛かりを持っているというのは君かな？」

学園長が屈んで尋ねる。

しかし、訪問者は怯えて物陰に隠れてしまった。

その訪問者に取りつて老いてしわを付けた見知らぬ老人は恐かったらしい。

「学園長、私たちが相手しますから」

千春とメリアルが前に出て、彼を退かせた。学園長は少し残念そうに背を丸めて元いた席に戻って行った。

「ほら、恐くないから。お姉ちゃんたちとお話しよう？」

少女たちの声を聞いて、訪問者は椅子の影から顔を出す。

「やっぱり子供よね……………」

「子供ですね……………」

二人はやっぱり不可解な点を重視する。

情報を持ってやってきたというのは、七歳くらいのうんと小さな女の子だった。

「……………これ……………」

女の子が決定的な証拠を出したのは、ジュースやお菓子で十分くらい餌付けた時だった。

「……………どこでこれを見つけたの……………?」

千春とメリアルは震える手でテーブルに出された物に手を伸ばす。

それは、見間違えようのない証拠。魔獣や精霊の百科事典を読み漁っても該当するものがない——世界でただ一つの、彼だけの力、彼以外が使う事の出来ないカード、『魔法のカード』であり、彼以外が持ち得ない力だったものだ。

「それね、私を助けてくれたお姉ちゃんがくれたの。きれいなお姉ちゃんだったよね。でも、お母さんが助けてもらったお礼を言つて返してきなさいって。汚れちゃってるけど、ちゃんと拭いたんだよ?」

女の子の言うように、確かに汚れはあった。

残酷な現実を告げているかのような汚れが。

出血による汚れが。

学園長も教師長も、千春もメリアルも最悪の事態を脳裏に浮かべてしまう。

「……………大丈夫ですよね……………?」

千春がぼつりと呟く。

「そのお姉ちゃんね、すごくおかしい事言っただよ?」

自分たちの想像と裏腹に、女の子は考えた、思い出した事をどんな口にする。

「とってもきれいで、髪もサラサラで、お肌もきれいで、美人さんなのに、自分のこと『お兄ちゃん』って言ってたんだ。アンね、ど

うただか、今でもわからないの。何でかなあ？」

女の子が一生懸命考えている雰囲気を出すためにうんうん唸って
頬杖を突く。

「・・・・・・・・・・どこまで・・・・・・・・・・律儀なのよ・・・・・・・・・・

」

メリアルが遂に顔を両手で覆ってしまふ。

千春はぐつと歯を食い縛る。そうしてないと、涙がこぼれてしまふ。

教師長が二人の頭を優しく撫でる。

彼女は知っていた。

だから、行動で慰めたのだ。

教師長であるリツカーは、度々この二人が今この学園にいない、もしかしたら今生死も危ういかもしれない少年によく女装をさせて遊んでいた事を知っていた。

三人ともいつも仲が良く、まるで三姉妹の様に見えるほど、仲が良かった。

でも、二人に比べても、彼はまっすぐに真面目で、言われた事や任せられた事は、最後まで責任を持つ性格をしている。

女の子の話聞いたリツカー教師長もメリアルと同じくことを思ったのだ。

なんて律儀なんだろう。

きつと逃げる時、スカートは走りにくかったはずだ。

替えの服がないはずがないのに、彼は最後までその服でいた。

二人が用意してくれた服を脱ぎ捨てるといふ考えは、きつと彼の頭に、少したりともなかったのだろう。

五分後、その女の子は帰って行った。

祈り、願い、強く望んだ。

真面目すぎるくらい優しい少年の無事を。

クラスメイトよりも近く、多くの時間を共にした少女——じゃなく、少年がいなくなつて、すでに一週間が過ぎつつある。

「カリノ。気持ちは分かるが、いつまでもそのままではいけないぞ？ 待っている間に出来る事は多くあるはずだ。勉強とかな」

空気の読めない自分にクラスメイトの視線が向かっている事にも知らず担任は、優しく笑いかけてきた。

「はい」

短く答えて、早くどこか行けと念じる。

そう願ったからではないが、すぐに担任は教室を出て会議に向かう。

「チハルさん。大丈夫ですか？」

彼がいなくなつてすぐに女子数人が私のもとへ寄つて来た。

「ええ。大丈夫」

担任への態度と変化なしの態度に女子数人は態度に困っていた。

このままここに居たら空気が悪くなる。

今は使われていない何の準備室かもわからない一室。

彼の居場所。

彼の気配が感じられる。

もはや、彼のもう一つの部屋で隠れ家。本棚の本も、戸棚の食器、

コンセントから抜けれているポット、窓の黄ばんだカーテンは掃除用具に再利用されて代わりにクローバーのカーテンがしばらく溜まっていた埃を飛ばす。

そして――。

「アリス……アリス……アリスう」

この部屋で一番彼の温もりが残留している机。椅子に座り、机に突っ伏す。そうしていて彼を感じられるとは思えないが、その時の私は錯覚を覚える。

さっきまで彼が此処に座って、昼寝してたり、魔学の研究をしていた。

それはただ、窓側にあつたその机が今日の陽気に照らされただけだ。

「チハルちゃん……」

途端に現実に戻された。

同じ境遇の女性。

同じ人を待っている。

「……良いの、生徒会長が授業をサボっても？」

「何言つてんの？ 自分もサボってるじゃない」

お互いにわからない。

なんて話しかけたらいいか、なんて。

三人だったのが、今は二人。当たり前の三人組。

しかも、とても大切な人だった人が消えてしまったのだ。心の中はもう、ぐちゃぐちゃ。

「――限界なんじゃないですか？」

顔を上げて彼女を見る。

「――っ」

視線がぶつかる。

腕をギュッと掴み、視線が尋常じゃないほど泳ぐ。

「限界ね……お互いに」

ピタリとメリー先輩の動きが止まる。

ダツと駆け寄る、というより私に向かって倒れてきた。

「……………うん、もう無理みたい。だって、だってだってっ！　だいじな人が二人もいなくなっちゃったんだよっ！？」

二人……………アリスともう一人は……………ああ、そうか。

自分より年上のはずなのに、メリー先輩はとても小さく感じられた。

「先輩はアリスのお兄さん、フィレルさんっていう人を好きだったよね？」

それを言った途端、先輩の震えが一瞬止まる。

話に聞いていただけだけれど、この反応から見ても私の判断は間違っていないかった。

先輩の顔を擦りつけられた膝がほのかに生暖かく感じる。

——好きな人。

存在の喪失によってそれが明確なものになるというケースが多々あると本で読んだ事がある。私の場合もそうらしい。

「……………チハルちゃんたら」

鼻をすすり、何かに気が付いた先輩が顔を上げて私を見る。その表情は決して笑みと言えず、かといって悲しみに暮れているというものでもない。

背一杯の虚勢、といったところだろう。

何に強がつて、何を取り繕うと言えど、それは自分自身だろう。

「そんなに泣くなら、ハンカチくらい出しなさい。雨が降ってきたのかと思っただじゃない」

え？

一瞬何の事を言っているのかわからなかった。

そして自分の顔へ手を伸ばす。

そこは決壊したダム状態。収まる事を知らない涙腺は大粒の滴を流し続けていた。

私はメリー先輩以上に彼のいない世界を悲しんでいた。

悔んでいた。

恨んでいた。

妬んでいた。

この世を不条理と決めつけて。

全ての悪を私から彼を奪った世界に押し付けていた。

苦しかった気持ちをきつと私は見ないようにしていたんだ。

だから、意識した途端に体が先走った。

泣いたんだ。

「う、ううあああつ、アリスッ、アリスアリスッッッッ！
アリ、ふううつ・・・・・・」

とうとう心も体も悲しみに耐えきれなくなったらしい。

授業中だという事も忘れて、全て忘れて声を張り上げ始める。

誰かに聞かれるなんて事も考えなしに、声が溢れだす。

「・・・・・・チハルちゃんはやっぱり、そうなのね・・・・・・」

もうここまで来たら誤魔化すことなんてできないし、察せない方がおかしい。

「先輩、私・・・・・・」

「うん・・・・・・」

立場を逆転。今度は自分がメリー先輩の胸で泣き、告発する。

「私はアリスが好きなんだ……もう、どうしようもないくらい……」

「うんうん、知ってるよ。もうあの買い物の日で確信してたわ。ずっと一緒に居たい」って言ってたものね」

私の頭を撫でて先輩はそう言う。

「覗き見なんて、趣味悪い、ぐすつ、悪い……」

涙と一緒に心がどんどんあふれて、溢れすぎた。零れて流れ続けたせいで私の心はいつしか、誰かが居なくなつた分が空っぽになつたような。

そんな感覚に浸された。

メリー先輩とともに泣き崩れた翌日。

わたしは人生で最大級の混乱の渦にいた。

「皆が驚くのもわかる。わかるぞ。この時期にこんなタイミングでこんな転校生が来てみんなビックリだろうが——彼女は『アリス・ノイネンス』だ。ドッペルゲンガーの様だが、『ウィディアン君』ではないぞ?」

担任は朝のホームルームであるのに、やたら元気に告げる。

その背後の黒板には、彼の唯一誇れる技術である綺麗な字で『彼女』の名を書き記してある。

「先生、皆さまへのあいさつの代弁ありがとうございます。だけど、『こんな転校生』はないんじゃないやありません？」

『彼』に酷似した転校生は礼儀正しくも文句を言う。

その素振りは、勝気でどこなく生意気そうだったけれど――
――女の子だった。

当たり前前に女子の制服を着て、当たり前のように男子よりも髪に艶があり、肌には張りがあるきれいな容姿。見た感じも女の子としての雰囲気は漂っている。

「みなさん、初めまして」

彼女は女性らしくスカートの両端をつまみ、

「本日このクラスに転入しました、アリス・ノイネンスです。気兼ねなく接してくださいませ」

ごめんなさい。（前書き）

実は、すでに削除済みですが、第五部の「錆びた歯車」は別作品（元ネタ：アスラクライン）の話を投稿していたのです。

このミスは大変皆さんの混乱をまねたと思います。

すみません。

謝ってもどうしようもないことです。

今後より一層の注意と速度を持って、作品を進めていきたいと思っています。

どうか、今後もご愛読なさいませ。

。ひとまず、次回からの話の方向性をお伝えしておこうと思います。

いめんなさい。

私がいつどこで生まれたのか、それはもはや時の流れに朽ちてしまった。

ならば、再びこの世に生きがいを感じた瞬間を、——あれから名を授かった日を誕生日とでもしようか。

よし。そうしよう。それならば、私も納得がいく。

ロロディヤ・アサナトルと名付けられた、あの雨の日が我が生誕の時。

しかし、私と奴の馴初めを此処で話すには、いささかことを性急

すぎる気がする。

勿体振るわけではないが、それでも？欠陥持ち？の過去話だ。過去だからと言って後回しにするわけではないが、それでも『優先順位』という物があるはずだ。

私達の物語は、その『優先順位』の最前列にはいない。

ならば、まずは現在も、迷い、戸惑い、苦しみの中にいる少年少女の在り方を語らねばなるまい。

今こうしている間も、彼らにとっては過去になるだろう。

私にとっても、過ぎ去った時間の、異なる場所での話になるわけだが。

それでも、彼らにとって今も引きずっている事なのかもしれない。

まっ、人間なんて、人生なんて、そんなものだろう？

何も考えずに歩いて、時間とともにいろんなことを知り、嫌なことも、楽しい事も学んでいく。中には、敢えて難しい方向へ行くことにもなるだろう。

けれど、そんなもの。

生きるってことは、死ぬってこと。

生きるってことは、苦しむってこと。

死んでしまっからこそ、歩くことができて、

苦しんでしまっからこそ、楽しみを見つけようとする。

生きていることは、どうしようもなく面倒で、どうしようもなく波乱で、まるでピエロだ。

死が救済ならば、生は償いの途中か——いや、罪を犯すことだ。

その罪を生きている間に、償えることもあれば、積み重ねて、死後に償うことになるだろう。

話が脱線したか。

これから話す物語、過去話は、単なる経歴に過ぎない。

空虚な心を持ち、安息のない未来へ向かう少年に、

先天的に罪意識を抱え、自我崩壊の壁に寄りかかる少女や、

自重を与えられ、いつ燃料が枯渇するかわからず爆走する少女の、

今に至る過去話。

いわば閑話休題という奴だ。

本番はまだまだ始まったばかり。

しかし、過去話をして、場を始めからから繰り返すのも悪くはないだろう。

そうだな。

メモリアル・ファイル
『記録保管』

『羽根のない鳥』

『ジシンの敵』

とでも名付けようか。

一気に語ってしまったては面白くないだろう。

そして誰の過去かという事も、語るには惜しい。

中には、語らねば進めぬ者あるが、敢えて語らない物もあっていいだろう。

では、まずは？翼を？がれた人？の話をしようか。

ごめんなさい。(後書き)

次回主な三人の過去話をお送りします。

.....なぜ、こんなミスばかりをするのやら。

肆枚目：羽根のない鳥 Part 1

幼少のころ、ある違和感を覚えていた。

手をつなぐ母子の姿。

それがとても遠くて、私の斜め前にある手。それがとても憚^{はまか}るものだった。

私の母・季菜は、私を可愛がっているようには見えなかった。それはまるで動物を世話しているような感覚かもしれない。

私は多分、お母さんに手を引いてもらいたかったんだと思う。

けれど、私はなく事もあまりなく、我がままという物もあまりしなかった。

それがいけなかったかもしれない。手のかかる子は可愛がられるらしい。だから、姉は愛される。お父さんが最近お見合いを進めて困っているらしいけれど。

姉や弟が母や父に手を引かれているところを見て、私は自分が消えてしまふと思った。

いらない子。

私は、いなくてもいい子。

自分の部屋に戻り、私は受けた衝撃が反響する身体を無意識のうちに抱きしめていた。そうしなければ、煙のように散り散りなってしまうそうだったから。

なぜ、自分がその時、驚いたのか、いやそれが驚きだったのか本当のところは曖昧で、勘違いかもしれない。私の抱える問いは、私

というこれまで気づいてきた一本の積み木の塔を簡単に崩し、壊す。そして、放心状態から覚めた私は気づいた。

姉と弟の共通点。

私を認識する皮肉な点。

すべてを破壊する一点を。

そのひ、わたしは、はじめて、ないた。

子供らしくない、声を殺した嗚咽に、誰も気づくことはない。

私は誰からも気づかれぬまま。

その日から太陽の光が苦しく、月の光が心地よく感じるようになった。

「私の出生についてお話にしてもらえていただけないでしょうか？」

その一人の少女は、自分の事を全く知った気にはなれなかった。

誰しも自分の存在を証明するモノを知る事はあまりない。天職に巡り合う事もあれば、一生達成感のない怠惰の絡む職で終わる者もいる。自分を知る事は、他人を知る事と変わらず難しいと考えていたが、その少女はその多くの人がぶつかる壁に、亀裂を見出していた。

だが、どれだけ幸福に見合う思い出を得ようとも、どれだけ功績を上げようとも、その亀裂をそれ以上広げる事は出来ていない。自分に価値を与える決定打がわからない。

むしろ、この亀裂は破壊の象徴だと考えていた。

終止符らしいものを見つけてはいるが、それを見つけた時の衝撃に耐えきれぬかの自信がない。

事後に不安を抱くと言う事は、その事象についてある程度の予想が付いているという事になる。

この世に現れる前から、汚染された事実。無責任な罪。それが自分の正体。それを自覚する一手を受けるのが、怖い。

しかし、私の許容量は限界に近かった。

「何を言っている。お前はこの狩園家の次女、私の娘だろう」

その男狩園玖島^{くしま}は、確かに自分の父親だ。

それは私という自我が芽生えた時から確認し続けたことだ。

認めたくはないが、自分の存在のいくつかは彼の存在に重なる部分があった。長年観察でそれは確かだ。

だが、それはあくまで私側からの認識であり、事実の確認にはなっていない。

「私がお尋ね申し上げている事は、お父様との血縁だけではございません」

その言葉に彼の気配が揺れた。

日頃から放っている彼の圧迫が全く感じられなかった。

私と彼は今、向かい合っていない。それでも彼の表情が、いつも厳格な顔つきが崩れたのを想像するには容易。

それほど彼の背中が頼りなく、不安定に見えた。

「もし、私が申し上げる事に誤りがあったのなら、お叱りなっ

かまいません。親を疑うような親不孝者、勘当の覚悟もございます。しかし、その代わり嘘偽りなくお答え下さい」

ふと、自覚した。

私は、怯えているのか？

向かい合っていないくて良かったと思う。これが向かい合っていたとしたら、彼は間違いなく、声をあげ、私を叱り、この話を無理やりにも中断しただろう。そして、この話題は二度と両者の口から出る事はない。

私は震えていた。

今の家族に、不安も不満もない。

けれど、安らぎは、分らない。正直に答える事は出来ない。お姉さまは奇天烈で猫かぶりな人だけど、嫌いではなかった。弟は素直に可愛い。お母様は、少し苦手だが、優しいところはあった。

お父様は、私に不安と疑念を抱かせる人だった。その仕草の一つだけでも、他の家族とは違うものがあると感じていた。特にお母様とお父様が私に向ける視線が不快だった。愛情が全くないわけでもなく、かといって嫌悪ではないわけでもない。拒絶を露わにしなかったが、それはどこか同情、憐憫。お母様と私は一度教会前を歩いた事がある。孤児院だったそこには、やはり親のいない子供がいた。その時の眼差しと私を見るそれは、同じだった気がするのだ。

「私は――」

喉に込み上げてくる不快感。

言い出したのは、私だ。

此处で引き下がる事は、許さない。自分が許さない。

この不安定な家庭に安定を求めたからこそ、私はこうしてこの男の前にいる。

「私は、お父様とお母様、玖島くしまと季菜ときなの間にできた実の娘ではあり

ませんね？」

今度は明らかな変化を見せた。

鬼の形相とは、今の彼のような者を例えるだろう。眉間に刻みこまれた皺。見開き血走った眼光。そして激情して真っ赤な顔色。

「何故かとは言わないで下さい。ただ予想です。確証はありません。ですけど、この事を知っているのはあなただけじゃない。恐らくお母様は真相を知っているでしょう。茉莉まつりや兼かねるを見る目は、私などよりも温かいのですから」

父親として接してきた人は、言葉を失ったように押し黙り、覚悟を決めるように顔を伏せた。

「……季菜ときなは、恐らく疑問を持っているだけだろう。正確な事情は知るはずがない」

「ですが、私に接するお母様の態度はどこか、余所余所しいところがありました……。私の記憶の中では、お母様は私を娘と呼ばれることは一度たりともありませんでした。——そして、あなたもです。玖島さん（……）」

歯をかみしめた様子が、口元の筋が引くことで分かった。
なんだ。

この人はただの人だ。

自分が今まで何をこんなにも恐れていたのか、わからなくなった。彼に畏怖を感じ、畏怖を抱かされていた自分はもういないことに気付いた。

「私はこの家を出ようと思っています」

そう切り出すと、彼は怒りとも憎しみとも異なる驚愕の表情する。

私は此処にいてはいけない。

自分のためにも、この家のためにも。

言わば、私は不発弾のようなものだ。

私がいる限り、この家庭は不安定な細道しか歩けない。錘おもりが大きいすぎる。私という錘おもりは、その存在自体でこの家の柱を削っている。恐らく彼らにとって、特に母親である季菜は落し物を預かった程度の感覚か、夫に対する弱みとしての認識に思っているだろう。父親であるこの人も同じだ。彼は私の存在があることで、時知れず怯えている。

「初めの資金さえ出して下されば、二度とこの家には近寄らないことを約束します。如何でしょう？」

「……此処を出てどこへ行くというのだ？ お前には身寄りはないぞ？」

やはり私の母親はすでに亡くなっているのか。

彼の言葉より私はそう判断する。それとも行方知れずとなっているのか。どちらにせよ、私とその人が逢っても打ち解けるとは思えない。

「行く宛てはありませんけど、取りあえずは西洋の方へ行こうと思います。それが国内を一回りした後、海を渡ろうと考えてます。ですから、始めはモンテルト港へ向かうつもりです」

彼は迷っている。

責任と誘惑を行き来する彼の心情が容易に想像できる。

「学校はどうする。後一年すれば、卒業だろう。一年くらい遅らせてもいいのではないか？」

つまり、一年すれば出て行くことを認めるということか。

だが、そんなことできる訳もない。

「私は明日にでも出て行く準備はできています。一年も明日も同じことです。——では、お尋ねしますが、あなたは一年私から無視され、あなたを、そして彼女を親と呼ばないことに耐えられます

か？　そしてその状態を世間から揶揄されることを黙認される覚悟が御有りですか？　私は卒業さえできればいいと踏み、最低の成績を残しますよ？　この狩園家にそんな汚点を残していいのですか？　私はあなたの家庭を傷付けることを望みますよ？」

もはや、止められて止まる私ではなかった。

どこまで行こうと、どこまで落ちようと、私がこの人から秘密を問いただしたことで出発は決定していたのだ。

「わかった。行きたいのなら、資金を渡そう。だが、すぐに渡れ。

そして私の姉を頼れ。一人で生きて行くことは許さん」

「有難うございます。ですが、あなたに姉がいたことは知りませんでした。それも海外にいるとは」

「姉は父から勘当され、男と海を渡った。そいつは西洋からの旅人だった。——とにかく、場所はラトナピア。紹介状を書いてやる」

「では、明日というのは無理ですね」

「ああ、明日には無理だ。一週間以内に資金と船の用意をする。その間に荷物を再度用意し直すんだ。当てもない旅とそうでない時の荷物は違うだろう。途中危険なこともある。荷物は最小限に留め、出来るだけ身軽にしろ」

「はい」

礼儀を払い、退室する。

音もなく襖を閉めて廊下を進む。廊下を突き進み、自室の前で足を止めた。

自室の先、廊下の角から服の一端が見えた。足音を立てずに、近寄る。

背中を見せて立ち止まっている女性がいた。時代錯誤なその服装は、いわゆる着物という物で、髪はピンを幾つも使って後頭部で留めていた。廊下の角に隠れるようにして佇む彼女は、震え、そして、
「茉莉姉さん」

声をかけると、こちらが驚くくらいビクツと震えた。

間を開けて彼女がこちらを向く。

「大粒の涙を流す姉が、そこにはいた。見たこともないくらい涙の大きさに、一瞬圧倒された。いくら流してもその瞳がしつかりと姿を現すことがない。あふれ出る涙は彼女の心そのものを曝け出す。」

「聞いてしまったのね、茉莉姉さん」

「……うん、ちはるちゃん。どうして行っちゃうの？ 何で外国なんか……」

しゃくりあげながら、姉は私に尋ねる。

——良かった。

私は素直にそう思った。

姉は私がこの家を出ようと思った直接の理由を知らないみたいだ。恐らく、最後の、彼が自分の姉を頼るように言った件だけを聞いたんだと思う。

私も本当の母の素性や存命なのかは尋ねなかった。本当は知りたかったけど、そんなことを此处で訊くことはない。

私が願うのは、この家庭の安定だった。だからそれを壊すようなことを訊くことは、願いに反している。

「……ちはるっ、……ちはる……」

「茉莉姉さん……」

痛いくらいに抱かれた私は、一切の抵抗をせずにその身を預けた。「私は海外の文化を知りたいんです。私たちは、当たり前のように物を使いますが、その中には外国産の物だってあるんです。特に西洋は美術の面で優れていると聞きます。この国も独自の文化があります。私の興味は外にあるんです。色んな物を見たい。色んな事をしたい。自分の知らないことをたくさん知りたい。だから、

私は外国に行こうと思ったんです。——茉莉姉さん、止めないで下さい。別れるのは、さびしいです。けれど、決して会えないわけではないんですから」

そう言つて、私は姉を説得した。

姉の言葉を聞く限り、本当に肝心なところは聞いていないようだった。

その晩、再度あの人のもとへ赴き、姉に家を出ることを知られ、嘘の理由を言つてごまかしたことを説明する。

翌朝になると、私が家を出ることは家族全員に知れ渡つていた。食卓では、いつになく重い雰囲気だった。姉は眼元を赤く腫らして、弟は止めどなく何度も私の方を見てきた。

母は、その時は寡黙に徹して、動いたのは家を出る際に弁当を渡す時だった。

「——どうしても、行くのですか？」

「もう決めたことなんですよ、季菜さん」
応えはなかった。

その後は、いつものように送り出してくれた。

伍枚目：羽根のない鳥 Part 2

父から真偽を問いただした翌日。

私は何事もないように、これまで通っていた学舎の、自分に割り当てられた席に腰を落ち着かせていた。

特に思い入れはなく、ただ時間ができたから此処にいる。

そんな程度の低い理由だ。

「以上の事項より、今日から三日後に退学させていただきます」

職員室に入り、担任を見つけるなり、突きつけた退学届。

それに担任はおるか、教頭含める全教員が茫然。所用でやってきた生徒も、おかしい顔をしていた。

「親御さんとはもう…….?」

「はい。もうすでに納得してもらいました」

「この退学理由にある海を渡るとあるが…….」

「そのままの意味です。私は数週間後には、欧州の土を踏んでいるでしょう」

少しの問答が終わり、再び沈黙が訪れる。

誰彼もが言葉無く、動きを止めていた。

「考え直すつもりはないか、君の成績なら高等学校はかなりのところへ行けると思うのだがな」

私の担任は、他以上に生徒思いの教師だった。

それも、熱血系ではなく、静かに諭すような、けれど綺麗ごとばかりではなく、確かに相手の心に響く言葉を紡ぐ人だ。その為、生徒からは厳格で厳しい印象を受けるが、信頼はできると好印象。私もそれなりに、嫌いじゃなかった。

「それにもう一年で卒業だ。一年くらい先送りに出来ないのか？」

「すでに父は旅立ちの準備を始めて下さっています。それに、私は自らの意思でこの地を出ていく。失礼ですが、誰にも止める資格はない。それが親であろうと、恩師であろうとです」

「・・・・・・・・・・・・・・・・後悔はないな」

「はい」

担任ははじめ、捨てがたい物を見るように私を見、その後すぐに静かに頷いた。

そう。まるで、長年大切にしてきたけれど、壊れてしまった玩具を捨てねばならないような―――決断するようなくさだった。

職員室より自クラスへ。

時間帯を選ぶべきだったかもしれない。

私は自席につき、しばらくしてそう思った。

ざわめき際立つ教室内は、いつになく居心地が悪かった。

勿論その原因が自身にあるという事は、自ずと察しが付くことだった。しかし、ここまで伝達が早いとは。いや、伝達というよりも感染と言った方が、まだ的を射ているかもしれない。高々学年で一、二の成績を持つている一生徒が退学を申し出た程度で、ここまで混乱を呼ぶとは。人間は常識にとらわれる生き物らしい。同じ人間である自分が、ずれているのかもしれないが、育ってきた環境だけに私の基準は周囲と噛み合っていないらしい。

一日中微妙な視線を受けつつ、放課後となった。

担任には、あえて何も言わないでもらった。

「狩園さん」

何かするべきことはなく、荷造りをするにも、もうすでにできる荷を減らしただけ。簡単な作業は昨夜の内にすべて完了している。

旅の心得でも知っておくべきだろうか。

船で西洋へ行く。大体一か月以上の船旅だと思う。ならば、その

間に何をしているか、未だに船に乗った事のないから船酔いの心配もある。興味心は猫をも殺すし、退屈は魔女をも殺すらしい。前者はどうでもいいけれど、後者はそうはいかないだろう。

退屈は何より強力な毒だ。

魔が差すし。

「狩園さん、ちょっといいかな」

父にも担任にもあれだけの啖呵を切っておいて、船旅程度で不安になっている。

そんな時、良く見知った男子が背後にいた。

「ヒカル」

やや細身の男子。

黒髪に黒縁眼鏡。学ランも黒いため、全身真っ黒。

男子たる者己を鍛えよと一般的に言われ、その通りに肉体面を鍛え上げてきた周囲の男どもとは異なり、彼は細身で、顔つきも険しくなく、どちらかという途中性的な顔立ち。男の格好をしていれば、男に見え、女の格好ならば、女に見えるかもしれないような姿だった。

しかし、その心は男性に対して少し厳しい評価基準がある私から見ても、確固たる意志を持つ人物だと思っている。

「狩園さん、いくつか聞きたいことがあるのだけれど、いいかな？」

彼はいつもの無表情というか、淡白顔で私の前に現れた。

気分が良くも悪くもなさそうに。

敢えて、あてはめるのであれば、真剣なものだった。

「ヒカルが私に用があるなんて、珍しいです。何かよっぽどの悩みでもあるのでしょうか？」

少しばかり彼とは交流があった。

しかし、その事を知るものはあまりにも少ない。

放課後によく勉強や本について語るのみだったためか、男女が共にいれば、男女間の噂が広まる恐れがあるが、そういうものは特になかったと思う。

男子は普段本など読むことはあまりないし、よって図書室に足を踏み入れる事はあまりない。

女子はあるかもしれないが、同じ女子である私に噂が耳に入っていないのだからそういう誤解はないのだろう。

そもそも私たちはほとんど偶然に出会い、時間があり、尚且つ人氣のなくなつた下校時間ぎりぎりでなければ、同じテーブルに着くことはなかった。

そのため、機会は二日連続であれば、一週間以上ない時もあった。
「学校をやめるそうだな」

「——知ってたんだ」

「馬鹿者。職員室で堂々と宣言し、何時間経つたと思っている。すでに全学年に広まつている」

彼は半ば私を叱るような言い方をした。

何に彼が苛立っているのかは、明確には理解できなかったが、それでも私が関与しているから苛立っているのだとは分かった。

「認めましょう。私は此处を退学し、海外へ向かいます」

「留学ではなくてか？」

「はい。帰ってくるかはわかりません」

「何の目的があつて？」

「自分を探すため」

それが今言える精一杯のことだった。

というより、なぜ私が真実であるに近いことを彼に行ってしまったのかが不思議でならない。誰にも言わずにいようと思っていたのに、いつもの気兼ねなしの感覚で言ってしまった。

言葉の意味を吟味するように、彼は押し黙り、私を睨む。

その表現が正しいはずだ。彼は怒りを覚えているわけでもないが、

確かに睨んでいた。

「会えることは」

「多分無いかもしれません」

「手紙を送ることは」

「落ち着いたら、実家に住所を送るつもりです」

「正確な日取りは」

「船の手配が終わる頃——恐らく、一週間後。けれど、退学は三日後です」

それから彼は黙って虚空を見つめていたが、

「三日後、裏の丘に来てくれ。少しでいい。放課後だ」

そう言い残して、彼は私の前から去って行った。

しかし、その雰囲気から彼が私に伝えるべきことがあると察する。

「狩園千春、俺はお前を異性として愛している」

衝撃的な、それでいて熱烈な告白だった。

これほど言葉に意味を感じたことはなかった。

今までこんなにも率直な意思を感じたことはなかった。

でも、私の心が震えても、それに応える事は出来ない。

「私にとってあなたは一人の友人です。競い合い、励まし合う。簡単な話、私はあなたを恋愛対象の異性としてではなく、友人として見ていました」

「——俺に好意を向ける事はないと」

私の漏らす答えに、彼は確かめるように言葉を重ねる。

しかし、その顔はあまり晴れやかではない。

「友人として手紙を送る程度は許されるか？」

やがて彼が出した条件は、いや条件というよりもつなぎ留めておきたいという感覚だと思う。

「はい。それはとてもうれしい事です。慣れない地で旧友から手紙が届けば、活力も出るでしょうから。待ってます」

一週間後、私が旅立つ時に母と父の姿は見られなかった。

あの人達なりに思うところがあつたのかもしれない。後ろめたい思ひだつたのか、それとも何か別の理由があつたのか。

それでも、姉と弟はいた。そして学校での友人も何人が港に足を運んでくれていた。

だが、やはり衝撃的なことだつたからだろう。

ヒカルの姿が見えないことに、少しだけ残念な気持ちになった。

「・・・・・・手紙、書いてね？」

「はい。茉莉姉まつりさんは、泣き虫を卒業して下さいね。別れも再会も泣いてばかりでは恰好が付きませんよ？」

熱い抱擁を交わし、私は姉にそんな捻くれたことを言う。
そして、目線を落とす。

涙ぐみながらも、その眼に力を持った八歳児は、軽々と持ちあがつた。

「兼かねる、サヨナラです」

「——はい。さよなら、お姉ちゃん」

離れたくない、そう言うかのように私に抱きあげられた弟は、首にまわした手で私の服を握りしめていた。

やはりこの子と姉だけは、私の家族に思える。親として接してきたあの二人はもう他人になってしまったけれど、この二人だけは、きつとつながりを持て続ける気がする。他人と割り切ることがない。そう思える。

「さあ、兼。離して下さい」

「——いやだ」

その言葉に、私は驚いた。

「兼！ 千春を困らせちゃダメ！ 離さない！」

「絶対に嫌だ！！」

姉の言葉に逆らうように首を振って、離そうとしない。

いつも私が姉、それが母の後について回っていたこの八歳児が初めて見せた反抗だった。

私は弟を引きはがそうとする姉を止め、そつと兼ねるを抱きしめる。

そして素直に彼の耳に言葉を紡ぐ。

「兼、聞いて下さい。あなたは私がない間に強くなって下さい。あなたはいつも私たちの後についてきてくれた。私はその事がすごくうれしくて、弟というものが誇らしかった。だって、こんなにも可愛い弟がいるのですから。姉である私は強く、正しくあるべきだと思っ生きてきました。でも、私のいない間、あなたは泣いては駄目ですよ？ そうですね、今日くらいはいいですよ。泣いていいのは今日だけ。でも、明日から、あなたが家族を守る人にならなくてはいいけません」

「・・・・・・家族を、守る？」

「はい。お父さんとお母さんはいつまでも大きく強い人ではられないのです。だから、男の子であるあなたは、誰も守れる男にな

らなくては。父を、母を、そして茉莉姉さんを守る人になって下さい」

「ぼく、出来ないよ……喧嘩も強くないし、すぐ泣いちゃうし」

「そうですね。でも、力が強いことや泣かないことが強くなるという事ではないんですよ」

「……どういうこと？」

いつの間にか手を離して、上体を起こした弟が顔を見せた。

涙を残しながらも、分からないことを必死に分かるうとする健気な努力を感じた。

「自分を守り、家族を守る。それが出来ればいいんです。全てを倒さなくてもいい。どうしても痛くてたまらなければ、こっそり泣けばいいんです。でも、今より泣くことがないように、心を強くしなさい」

そういつて、私は彼を下ろす。

トランクを持ち、姉たちの背後の級友に笑顔を見せることで別れを告げる。

帽子を被り、彼らに背を向けて乗船する列に並ぶ。

「千春、待つて！ これをお父様から預かってきたの」

順番を次に控えた時、姉が駆けよってきた。

「絶対、絶対、絶えええっ体！ 手紙書いてよ！ 写真も送って！ 忘れちゃ嫌よっ！？」

本当に最後まで格好付かない。

泣いて、泣いて、泣いてしかないじゃないですか。

チケットを切り、乗船する。船の後ろから顔を出し、軽く手を振った。それだけで、私だと分かったようだ。

良く映画とかで、船が見えなくなるまで手を振るシーンがあったりするけど、本当にあの人たちはやりそうだ。

本当なら、さっさと客室に行きたいところだが、？ 今生の別れ？

くらい付き合ってみるのも悪くない。

陸枚目：自信と不安Ⅱ 味方と敵 Part 1

「会長、今月の決算の書類に判を押してもらえますか？」

「はいはい」

役員の後輩に渡された書類に、鍵付の引出より取り出した特大のハンコを叩き付ける。その他にもサインやら、不具合の確認とを数人の役員で分担していく。

「そろそろ上がっていいわよ。残りは明日にしましょう」

私の一声に、役員ともども肩の力を抜き、一気に脱力する。

その後は生徒会室に残り、雑談する者、早々に帰寮する者、連れ立って食事に行く者などまばらだった。

「お疲れ様です」

そして自分を残して最後の数人も生徒会室を出て行った。

ここからはメリーアル・ハジエリカだけの時間。

生徒会室を私室としても扱っている面がある彼女は、三日に一度はこのような行動をとる。

それというのも、彼女が彼女であるための行動だった。

生徒会長という役職は、全生徒の頂点に立ち、率いて、時には教師との対立もあり得る立場にある。全校生徒の立場を尊重し、より充実した生活を送れるようにするのが生徒会執行部である、とメリーアルは考えている。

しかし、昔の自分を振り返ってみれば、そんな大層な役職を担えるほどの技量は持ち合わせてはいない。技量どころか、他の生徒よりも自分は劣っていると思ってきた。

メリーアル・ハジエリカは、その昔いじめを経験していた。

今でこそ、明るく、慎ましく、強くあろうとしている彼女だが、
当時は泣き、殻に籠り、助けを乞う勇氣すらなかった。

そのきっかけを与えたのは、誰であろう彼女が初めて焦がれた少年だった。

それはいわゆる初恋という未知のもので、彼の少年は自分よりも目立っていた。

目立っている故に孤立していた。

孤独を知っていた。

よくよく考えてみれば、彼は一体何を体験して、あそこまで確固たる信念を持つ事が出来ていたのか。

私はワイシャツのボタンを一つ、二つ外し、自分の勇気の源であり、思い出の品でもあるものを取り出した。

それはガーネット石榴石が嵌まった銀のペンダントだった。

未加工の部分を残したその宝石は、宝飾品というよりも鉾石らしさを持っており、しかし、輝きは燃えるような赤だった。

『ガーネットに込められる意味は、真実や友愛だ。というわけで、
新友の証』

これにくれた彼は、私の想いにも気づかずにこれを渡した。

いや、聡い彼のことだったから、気づいていたのかもしれないけれど、敢えて何も言わなかったのかもしれない。

奇しくも、これが送られた日は中等部の卒業式で、彼が行方知れずになった日だったのだから。

彼はどうしていなくなったのか。

何か目的があって出て行ったのか。

わたし達が卒業した時、アリスはまだ13歳だった。一人ではまだまだ不安定な時期。

そんな時に彼は幼い妹を一人残して、どこかへ姿を消してしまっ

た。

その時、私は一人にされ、泣き続ける彼女を宥めることに付つきりになり、自分の悲しみを見ようとしていなかった。いや、気づかないほど幼いアリスの泣き顔が衝撃的だったのだろう。

多分それは、自分を見ているようだったから。

自分の代わりにこの子が啼いてくれていると思ったから。

一人で立てないこの子を、私の分も泣いてくれたこの子を支えようと心に決めたからだと思う。

それが確かかどうか、そんなことは分からない。

でも、私はアリスや新しい異国からの友達のことを自分以上に気を遣い続けると思う。

何せ、私は彼女たちよりもお姉ちゃんなのだから。

兄のいなくなった妹の支え木になり、

故郷より遠い異国にやってきた少女の不安を取り除こう。

■

■

私が初めて彼に出会ったのは、今より数年前、確か初等部の時のことだった。

当時、私はいわゆる？いじめ？という問題に悩んでいた。

それには加害者も被害者もないのだろうけれど、私は被害者で、加害者は当然というか一部のツンケンした女子だった。

ツンケンという表現をしてしまったが、まさにその通りだった。

周りよりも少しとがった感じを出して、リーダー格の生徒が一人いて、その周りに数人の子が取り巻きとしていて。

生徒会長になる前の私は、居間と比較するととてもとても弱々しかったんだろう。

だから、まだ小さかったアリスにも心配されてしまったんだろう。

「どこかいたいところあるんですかぁ？」

屋上の扉に凭れ掛かって一人涙しているところに影がかかる。

涙の痕を気にせず、若干ゆがむ視界で見れば、そこには黒髪の女の子がとても悲しそうな顔をして私のことを見ていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・だれ・・・・・・・・？」

私が駆け込んで来た時には、誰もいなかったのに。

そう思っていると、何かが頭の上に落ちたのを察知した。

それはなんでもない、ただのハンカチ。

「はい。これでふいて」

女の子は落ちてきたそれを当然のように私の頭から取って、私の顔に突きつける。

どうすべきかと迷いながらも私はそれを受け取って目元を拭う。

「お兄ちゃん！ちゃんと渡してよ！」

その声に私は肝を冷やした。

心臓を停止させそうになった。

この小さな子だけでもびっくりなのに、まだ誰か人がいるというのだ。驚かずにはいられない。そして泣いているところを見られたという羞恥心が私の中でいっぱいになる。

けれど、返ってきたのは気の抜けた無機質な声。

「こういう時はね、アリス。何もしないで上げるのが優しさになるんだよ」

白と赤が印象的な男の子で、けれど、その目が合うとナイフのような鋭利なものを感じさせていた。

学生服は黒だけれど、その上着ではなく、真っ白なパーカーのフードをかぶっていて。

黒も茶もなく、ましてや赤でもない、純白というよりは透明感を持っている頭髪。まるで色素が抜かれたようなそれ。

そして体内を巡るその血そのものを体現した深紅の双眸。

白と赤。

無表情の彼を見た時、一瞬だけしろさぎだと思ってしまった。なぜだろう。

そのパーカーが毛並のようだったからかもしれない。

一人でいる姿が兎のさびしいと死ぬという話を思い出してしまったからかもしれない。

「見ないことにしてあげるから、泣いたっていいんだよ」

その不敵な笑みに、

「だ、誰がつ!？」

私は、

「ははっ、涙の痕残してるし」

「——ッ!!!??」

泣くよりも体が熱く、混乱し、息苦しさで憤りを覚えた。

その時、私は分かった。

この人は、私で遊んでいると。

それがフィレル・ウィディアンとの初めての邂逅だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9656t/>

所在探し ～ 鬼となった者は何を思う～

2011年8月31日03時24分発行